

そば物語ソバ蒔き編 9/6



今回はそば物語ソバ蒔き編について、報告します。
新型コロナウイルスが社会的に大きな影響を及ぼす中、私たちNPO法人元気おおとよも、様々な活動を自粛しています。しかし、今こそ大豊町に元気を届けるため、元気にするために、今回のそば物語もイベントとして開催しました！

今回のそば物語は、ソバの種まき&ガレットの試食編です。当日は雲一つない快晴の中、7人の参加者を迎えてのソバ蒔きになりました。

毎年試行錯誤しているソバ蒔きですが、今年こそソバ畝を立て、ソバを蒔くぞと決意。しかしながら、なかなか思うようにいかない天候。夕立という名の豪雨にあい、イベント当日の朝にようやく畝をたてられる状態に。ソバは、水はけのよい環境が良いとされています。みなさんもソバを蒔かれるときには、傾斜地や、畝を立てた畑などがおすすめです。

そして、今年はもう一つの試みとして、3種類のソバの種を蒔きました。使った種は、岩原の方で栽培されていた赤い花のソバ、東北の方で栽培されていたソバ、私たちが作ってきた地ソバの3種類です。

ソバは他家受粉といって、自分自身の花では受粉をせず、ほかの個体から花粉をもらい受粉する作物です。これは、個体によって、めしべがおしべより長いものと、めしべがおしべより短いものがあるためです。そのため、多品種間での交配が早く、近く

に別の品種のそばをまくことは嫌われます。しかし、それを逆手に取ることにより、その地にあった特性のソバを残すことができます。ちょっと長くなりました（汗）

その3種類の種を、子供たちをはじめ、参加者全員で蒔いていきました。今回は赤い花と白い花のソバを畝ごとにわけて蒔いたので、花が咲くころが楽しみです！

そして、作業の後はお待ちかね、おおとよガレットの試食です。今年はイベントの中止が相次ぎ、出番がなかなかきませんが、やっと嬉しそうに頬張る素敵な笑顔たちに出会えました。（中平）

次回のそば物語イベント情報

11/22（日）そば収穫体験&そばの試食

12/6（日）そばの脱穀&交流会

2/7（日）そば打ち教室&実食

を予定しております。
みなさまのご参加をお待ちしております。

移住者紹介コーナー



今回の移住者紹介の方々は個人的に、満を持しての登場！！

林 利生太（はやし りゅうた）さん、彩香（あやか）さんご夫婦と、結婚して大豊町で生まれた結珠（ゆず）ちゃん三名の林ファミリーです。前々から取材したいと思っていたのですがなかなかタイミングが合わず、今回やっとご紹介することができました。林さん夫婦は移住されて4年ほど、大豊町に移住したきっかけや、住んでみての感想、今後の展望なんかを聞いてみました。

いつ大豊町へ移住？そのきっかけは？

利）学校教員になるために高知大学に入学したのですが、視野を広げるために休学し、柏島のNPOで教育活動をしていました。ちょうどその時に、嶺北で活動している大学の先輩の繋がりで、碁石茶作りをお手伝いするようになった事がきっかけです。

活動中に地元の方々とお話をするなかで、高須地区にある元郵便局舎をお借りできることになり、「ここで挑戦したい！」という思いで住む事を決めました。

妻とは高校時代からの付き合いなのですが、その際に、地元の兵庫にいる彼女も誘い、大豊での生活を始めました。

お二人は仕事など普段何をされていますか？

利）NPO法人ひとまきという若者向けのキャリア支援を行う団体を運営しています。元郵便局舎はシェアハウスとして、生き方を見つめ直したい若者を全国から受け入れ、理想とする働き方や暮らし方を選び直すサポートをしています。

その他には、大豊町中学校で柔道の指導をしたり、ベビーリーフの栽培をしています。

彩）ポーチや財布など、ハンドメイド小物の販売。ホームページの制作をしたり、インターネットサービスを作る仕事をしています。

《まだまだ質問は続きます！裏面に続く》

来た当時の第一印象から 今現在の大豊町の印象は変わりましたか？

彩) 最初は正直言ってお店とか全然なくて廃れているという印象でした。でも子供ができて、買い物ができないとか不便なこととかいろいろありますが、都会みたいに周りに気を使うことが少ないし、住みやすく、子育てがしやすいなと感じています。

利) 人が少なく、綺麗な川や山がいっぱい自然最高！という感じでした。あと空き家や産業の衰退などたくさん課題がありますが、「若者だからこそできる事がある！」と可能性も感じました。今でも、その想いは変わりません。

4年間大豊町に住んでみて困ったことなどありますか？

彩) 友達が作りづらいところですかね。同年代の女性と知り合う機会がなかなかなくて、気軽にそういう人たちと繋がれる場所があればいいなと思っています。

利) 最近是不動産関係にも興味が出てきて色々考えているのですが、空き家の情報がなかなか無いことですね。田舎で眠っている可能性を活かしてなにかできないかと思っていますが情報源が無いことに困っています。今は出かけると周りの家が空き家かどうかすごく気になってます (笑)

お二人の趣味などは？

利) 二人ともゲームが趣味ですね。妻はゲーム全般、僕はスマブラが特に好きです。

あと妻はイラストを描いたり、僕は最近、空き家探しが趣味になっています。

ある程度の年月を大豊町で過ごされて、 今後の展望などありますか？

彩) 今、エンジニアを目指してプログラミングの勉強をしているのですが、ホームページ制作などの仕事からステップアップして新たな仕事ができるように頑張りたいです。

利) 大豊町をはじめ、嶺北地域で活動していくなかで行政についても興味を持ち始めたところです。子供ができて教育のことも考えるようになりました。今後、大豊町の教育について関わることができたらいいなと思っています。また、民間として大豊町に影響を与えることができるような仕事をしていきたいです。

今回の移住者紹介いかがだったでしょうか？取材してみて、お二人それぞれ分野は違いますが、目標があってとても素晴らしいし、その力を活かして大豊町でもっと活躍してほしいと思いました。長々と取材したにも関わらず、お利口に筆者を迎えてくれたお子さん、とてもかわいかったです。結珠ちゃんありがとう！

この冬には第二子の誕生も予定されているということで、ますます林ファミリーの今後の活躍を期待してしまいました。



ピックアップ in ままもと

今回は、おおとよ小学校4年生の窪田会花(えか)さんの作文をピックアップします。

偶然目にした作文で、すばらしい文章に思わず引き込まれてしまいました。読めば、引越しのお手伝いが縁で、永淵地区で開かれた歓迎の会にも出席させていただいた窪田さんの子どもさんの作文でした。永淵の地区の皆さんともすっかりうちとけ合って生活している様子が分かり嬉しく思いました。永淵神楽にも参加しているとのこと。さて作文ですが、「それでも」にお父さんお母さんへの健気な気持ちが表れていて、思わずウルウル気分になりました。また、最後の「きれいな水とおいしい空気がスパイス」も、笑点の大喜利の回答に勝るとも劣らない見事な表現で、まさにスパイスの効いた作文だと思いました。会花さんご家族の皆さんの山での生活とカレー屋さんの奮闘を心から祈っています。(鄙)



山の中の生活
おおとよ小学校4年 窪田会花さん
わたしたち家族は、三年前にさいたま県から引っ越してきました。高知の山おくに引っ越すと、お母さんたちに教えてもらった時は、友だちと会えなくなるのがとてもさみしかったけれど、また、友だちをたくさんつくろうと思いました。引っ越しの一年前に、家族五人で、テントとねぶくろ、キッチン道具をバッグにつめこんで、九州と四国を旅してまわりました。弟は、まだ五か月の赤ちゃんでした。どこへ行っても、みんなやさしくしてくれました。それでも、お父さんとお母さんは、大豊町を選びました。理由をたずねると、お父さんとお母さんが初めて出会ったインドの山のけしきににっていたからだそうです。集落の人はみんな親切にしてくれます。私は夏が一番好きです。理由は、時々近所の人々が、大好きなスイカやプラムなどをえんがわに置いて行ってくれるからです。大豊に引っこしてきて、家の前で大声を出して姉妹で遊んでも、近所めいわくにならないところが好きです。少し不便なところもあるけれど、毎日、とてもどきどきわくわくしていて楽しいです。
お父さんは、大豊町に来て、ゆめだったカレー屋さんを開きました。最初は、こんな山の中にカレー屋さんがあると知らず、お客さんが来ませんでした。お父さんは、とても悲しそうで、(わたしにできることはないかな)と思いました。そこで、かんばんのマークを考えて、実際に作ってみました。今でも、それを使ってくれています。きれいな水とおいしい空気がスパイスになって、地元の新鮮な野菜の入ったカレーを、ぜひ食べに来てください。
私は、これからも、山の中の生活を楽しみたいです。



「移住」について思うこと

私自身、「移住促進」や「移住支援」という言葉をよく使います。しかし、「移住」と「転居」はどう違うの？ と、あらためて調べてみると、

「移住」→「永住することを目的として、住む場所を移す」
「転居」→「住居を変える、引っ越し」

どちらも同じような意味ですが、「転居」は、転勤など個人の本意でない場合も含むのに対して、「移住」は、個人の意思により永住を目的として「住む場所を移す」(時には「生活様式を変える」こともある)という意味を持っています。

通信・流通が発達し、人々の価値観や考え方も多様化した今日、「田舎＝不便」という方程式はもはや当てはまりません。誰もが「高収入で便利な暮らし」を求める時代も終わりました。それよりも「自分」にとっての「理想の暮らし」を考え、選択する時代になったと思います。

「移住」を希望する人は、それまでの暮らしを捨てて、人生をかけて自ら選んだ地に足を踏み入れてくるのです。私たちにできることは、その実現に向けて「お手伝い」し、「一緒に自分の住む町の未来を創ること」だと思います。(野田)